

内方

故也、御料と云も、御料人を略したる詞也、今時人のむすめの事を、御料とも御料人とも云人有り、あやまり也、よめ入せずばいふまじき事也、光大曰、御料と云は、人の妻の事のみにかざらず、打つどに、頼朝の事を御料と云ふたる事所々に見えたり、

〔碩鼠漫筆七〕内方の稱は貴賤に亘る例

後世に人の妻を内方ウチカタといふは、下さまにのみ限れる事とみゆれど、古くは貴人をも玄か呼し事と聞ゆ、さるは貫之集上卷に、延長四年きよつらの民部卿六十の賀つねすけの中納言内方せられける云々、按ずるに、恒佐卿の室家は、清貫卿の女、天延二年閏十月廿七日權記云、申時許、高遠少將内方口乳之後死去、是口中納言朝成第三女也、また正暦四年二月廿九日記云、早旦左京亮國平朝臣來云、修理大夫内方、自夜半有惱氣、已入滅、悲歎無極云々、卿補任に見ゆ、又室家は中納言源保光卿女ならむ、尊、など見えたるが如し、猶あるべけれど、又妻室を女房といふも、昔は貴人の稱なりしなり、

街妻

〔橘庵漫筆 初篇二〕畿内の賤民婦をさして街妻と呼べり、或曰、左傳昭二十二年に有仍氏の女の美色をいへるに玄妻と云、よつて玄妻の字にして、左傳より出たりといへり、例の文華によつて、鶏を割に牛の刀を用るにいたれり、按るに、字書に、鉉は賣也とあれば、賤しき婦をさして、賣婦ばいぶとしめ云ことばなり、鉉妻か街妻なるべし、東都にて、傾城奉公人の肝煎する者を女街と云も、街は售なれ、

喚

〔太閤記 十六〕醍醐の花見

長東大藏大輔、茶屋は晩日に及ぶべきを兼て期せしに依て、御膳の用意なり、將軍この茶屋へ成せられ、饗膳あらば急ぎ上よと仰しかば、大藏大に悦び則上奉る、略中見せだなにありつる瓢箪を御腰に物し給へば、是もかはりを被下候やうにと乞つ、茶屋のか、甘ばかりなる二三人兩、